

Minami Kyushu University Syllabus

シラバス年度	2026年度	開講キャンパス		宮崎キャンパス		開設学科		管理栄養学科		
科目名称	応用栄養学Ⅲ							授業形態	講義	
科目コード	302800	単位数	2単位	配当学年	3	実務経験教員			アクティブ ラーニング	○
担当教員名	出口 佳奈絵								ICT活 用	○
授業概要	本科目では、時々刻々と変化する生活環境への適応、身体活動に応じた栄養代謝、栄養状態の評価・判定、そして科学的根拠に基づいた栄養素必要量の求め方を修得することを目的とする。これまでに学習したライフステージ各期の身体状況や栄養状態に応じた栄養管理の考え方を幅広く理解したうえで、分かりやすい説明力を養うことを目指す。									
関連する科目	(履修前) 基礎栄養学、からだと栄養、からだと疾病、栄養教育論、臨床栄養学、公衆栄養学、応用栄養学Ⅰ、応用栄養学Ⅱ (履修後) 応用栄養学実習									
授業の進め方 と方法	教科書とパワーポイントを用いて講義形式で進行する。 授業内の練習問題で理解度を確認する。 授業内で課題解決に向けたグループ協議とプレゼンテーションを行う。									
授業計画 【第1回】	からだのリズムと栄養 生体リズムと栄養代謝、恒常性の維持について学ぶ。									
授業計画 【第2回】	ストレス時における栄養ケア・マネジメント① ストレスによる生体反応、代謝の変動について学ぶ。									
授業計画 【第3回】	ストレス時における栄養ケア・マネジメント② ストレスと栄養についてグループ協議を行う。									
授業計画 【第4回】	特殊環境における栄養ケア・マネジメント① 高温・低温環境における生体反応について学ぶ。									
授業計画 【第5回】	特殊環境における栄養ケア・マネジメント② 高温・低温環境と栄養についてグループ協議を行う。									
授業計画 【第6回】	特殊環境における栄養ケア・マネジメント③ 高圧・低圧・無重力環境における生体反応について学ぶ。									
授業計画 【第7回】	特殊環境における栄養ケア・マネジメント④ 高圧・低圧・無重力環境と栄養についてグループ協議を行う。									
授業計画 【第8回】	運動時の生理的特徴① 運動時のエネルギー代謝について学ぶ。									
授業計画 【第9回】	運動時の生理的特徴② 運動時の呼吸・循環応答について学ぶ。									
授業計画 【第10回】	運動・スポーツと健康③ 運動による健康の維持・増進、生活習慣病予防について学ぶ。									

授業計画 【第11回】	運動・スポーツと栄養管理④ 運動・スポーツと栄養についてグループ協議を行う。
授業計画 【第12回】	ライフステージ別栄養ケア・マネジメント① 妊娠期・授乳期の生理的特徴と栄養についてまとめを行う。
授業計画 【第13回】	ライフステージ別栄養ケア・マネジメント② 新生児期・乳児期の生理的特徴と栄養についてまとめを行う。
授業計画 【第14回】	ライフステージ別栄養ケア・マネジメント③ 学童期・思春期の生理的特徴と栄養についてまとめを行う。
授業計画 【第15回】	ライフステージ別栄養ケア・マネジメント④ 成人期・高齢期の生理的特徴と栄養についてまとめを行う。
授業の到達目標	①対象者の栄養状態を評価する基本的な考え方を理解できる。【知識・理解の獲得】 ②対象者に応じた栄養ケア・マネジメントの基本的な手法を理解できる。【問題解決力・論理的思考力の育成】 ③特殊環境における生理的変化と栄養ケア・マネジメントを理解し、説明することができる。【多様性理解の育成】
学位授与の方針 (DP)との関連	1. 知識・理解を応用し活用する能力-(1)／1. 知識・理解を応用し活用する能力-(2)／2. 汎用的技能を応用し活用する能力-(1)
授業時間外学習【予習】	講義前日、次回範囲の内容について教科書を熟読し、学習しておくこと。(90分)
授業時間外学習【復習】	管理栄養士国家試験の過去問題を解く習慣をつけること。(90分) また、普段から食と健康に関する情報に興味・関心を高めておくこと。
課題に対する フィードバック	・ 定期試験は採点結果を開示する。 ・ グループ協議に対する助言を行う。
評価方法・基準	①定期試験(60%) ②中間テスト(30%) ③授業内協働活動(10%)
テキスト	栄養科学シリーズNEXT「応用栄養学 第7版」(講談社)木戸康博ら編(2025)
参考書	・「日本人のための食事摂取基準(2025年版)」 ・健康・栄養科学シリーズ「基礎栄養学 改訂第7版」(南江堂)合田敏尚ら編(2026)
備考	毎回の予習と復習は大切である。 学習で得た知識の理解を深め、「応用栄養学実習」の考察として活用すること。